

役場ニ届出ヘン

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘済ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戸長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其証ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未満ノ者ノ尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ
但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルキハ本條ニ準シ其証ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五歳以上五十歳以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度内務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

○種痘施術心得書

第一條 種痘ハ左ニ掲クル者ニハ施サレルヲ可トス

- 一 生後七十日ヲ經サル者
 - 二 種痘ノ爲メニ一時増進スヘキ病患アル者
 - 三 丹毒流行ノ土地ニ住居スル者
 - 四 蔓延性ノ皮膚病アル者
 - 五 熱性病ニ罹リ居ル者
- 第二條 種痘ニ適スル時期ハ春(三月四月五月)秋(九月十月十一月)ニ季ヲ以テ最良トス然レトモ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊(三稜筋抵止ノ部位)ニ於テ各々三針乃至五針(受痘者ノ年齢体質等ニ隨フ)トシ名針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘疤ノ最輪互ニ密接セサル様注意スヘシ

第四條 施術ニ先テ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルトキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘漿ヲ採リテ移植スルヲ確實ノ良法トスレトモ此法ヲ行フコト能ハサルトキハ貯蓄ノ痘苗ニシテ成ルヘシ新鮮ナル者ヲ撰ヒ用フヘシ但痂皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採取及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲クル者ヨリ採取スヘカラス

- 一 痘疤ノ成形過度及過大ノ者
- 發暈非常ニ大ナル者
- 痘縁又ハ暈部ニ水泡ヲ生スル者

痘疮非常ニ降起シテ澄明ノ漿液ヲ漏出スル者 一種ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ呈セルカ如キ者

但此等ノ異常痘疮ノ近傍ニ在ル正疔モ亦同シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者 疔ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ハントスル者 痘疮ノ已ニ他膿ニ傾キシ者 爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘疮破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者營業不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 經過不整ニシテ不善感ノ疑アル者

五 天然痘ヲ經タル者 再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルハ通常接種後第八日(二十四時)ヲ以テ一日ト算ス下皆同シ)ヲ以テ佳ト

スト時時ノ寒暖及ヒ各人ノ性質ニ隨ヒ第七日又ハ第九日ヲ以テ適度トスルコトアリ痘疮ハ善感良性ノ者ニシテ其包含セル所ノ漿液ハ渾濁セス粘稠露滴ノ如クナルヘシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘疮ノ中心ヲ避テ疔面ヨリ斜ニ淺刺シ深ク刺シテ出血セシムヘカ

ラス

第九條 發痘一顯ナル者ノ痘疮ハ其漿液ヲ採ルヘカラス又數顆アルモ其一顆ハ傷クヘカラス

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯フヘシ(痘苗ノ貯蓄甚

シキヲ得ルトキハ五箇月間充分ノ効力アリ)

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點ト爲ス

一 接種後第二日以内成形ヲ始メシヤ否

二 痘疮常形ニシテ其大サ及皮下皮上共ニ同一ナルヤ否

三 紅暈ハ常形ナルヤ否

四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラザルヤ否

五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ徵候ヲ呈スルヤ否

六 痂皮ハ黯褐色又ハ黑色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否

第十二條 種痘善感ノ候微ハ左ノ經過ニ就キテ知ルヘシ

接種後第一日第二日ノ間ノ他ノ刺傷ニ異ナルコト無シ施術後針痕ノ周圍ニ淡紅色ノ小暈ヲ發スレトモ暫時ニシテ消失ス(或ハ此暈ヲ見サルコトアリ)

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ稍々隆起スルヲ覺ユ(經過緩慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ生スルコト有リ)

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル丹形若クハ楕圓形ノ小結節ヲ生ス

第五日ニハ結節細小ノ水疱ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル

第六日ニハ水疱稍々増大シ其邊緣隆起シテ疔ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ疔中ニハ稀薄透明ニ

シテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス
第七日ニハ諸病益々増進ス

第八日ニハ痘痕全ク成形ス其大サハ豆大コシテ周圍ハ焔腫シ微シク疼痛アリ
倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此期以前)微熱ヲ發シ或全ク熱候ナク顔
面ハ蒼白色ヲ呈スルコトアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水腫脹起スルコト有リ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル

第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凹隆ス然レ其形必ス
扁圓ナリ

第十二日ニ至ルアラハ痘痕其形狀ヲ變スルコト無ク此日ヨリ收靨ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊縁
ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス

爾後黝褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル厚痂ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ堅著シテ容易ニ剝離セス結痂
後八日乃至十日ニ至リ始メテ剝脫ノ後ニ遺セル癢痕ハ圓形又ハ楕圓形ニシテ淺々凹窩ヲ
爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス

但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其痘顆小コシテ七八日間ニ全ク經過
スルヲ常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徵ハ左ノ如シ

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ違セスシテ直ニ廣ク蔓延セル炎症ヲ發シ皮下ニ

硬キヲ覺ヘスシテ紅暈ハ不整形ナリ痘痕ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐
形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆疎ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ム
ル者アレハ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者
ト雖モ液下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコト無キニ非ス)

二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕
潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル

三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陷ル

四 第八日ニ至リ數病相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周
圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス

五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル癢痕ハ深クシテ不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ

第五 種痘ノ注意

第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルニ因ル者ナルカ
故更ニ三四週ノ後善長ナル痘苗ヲ撰ヒテ再ヒ接種スヘシ

第十五條 種痘ヲ施スコ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際ニハ接種後第八日ニ至
ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レモ受病者已ニ暗ニ天然痘ニ感染シ其潜伏期ニ於テ
接種スルコト問々アリ

第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ揭クル者ト雖モ熱性

病ヲ除ク外ハ總テ接種スヘシ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシムヘシ平常慣習セル食物ハ總テ禁忌スルニ及ハス又別ニ醫藥ヲ要セス

○徵兵検査規則

第一條 身體検査ノ要ハ合格ト不合格トナ區別スルニ在リ合格ハ身體強健精神異常ナクシテ兵役ニ堪フヘキモノ不合格ハ疾病或ハ畸形ニシテ之ニ堪フヘカラサルモノトス而シテ此検査ハ學術上諸種ノ方法ヲ施スコトヲ得

第二條 現ニ傷疾疾病ニ罹ルモ輕症ニシテ服役シ得ベキモノハ合格トス

第三條 現役兵ニ徵集スル者ノ身幹ハ五尺以上トス

第四條 兵役ニ服スル者ノ身幹ハ別ニ其尺度ヲ定メス

第四條 兵役ニ堪フヘカラサル疾病畸形ハ大約左ノ如シ

- 一 全身發育不全
- 二 骨筋糸瘦弱甚シキ者
- 三 脂肪過多ニシテ運動ニ妨アル者
- 四 慢性腺腫、慢性膿潰瘍
- 五 軟部ノ惡性若クハ著大ナル腫瘍、潰瘍
- 六 骨慢性炎、骨潰瘍、骨壞疽、骨腫瘍、骨軟化、佝僂病
- 七 癩瘡廣大ナル者或ハ骨ト癒著シテ運動ニ妨アル者
- 八 象皮腫、癩
- 九 出血病、白血病
- 十 動脈瘤、靜脈瘤及著大ナル脈腫
- 十一 慢性關節痿痺質斯、慢性痛風ニシテ著シキ器質ノ變化アル者
- 十二 癩癧、癩癧病
- 十三 脊髓勞、進行性筋瘦小
- 十四 白癩、癩癧
- 十五 頭部畸形ノ著大ナル者
- 十六 眼

- 眼ノ内反、外反及淚癢
- 十七 角膜紅彩膜ノ疾患ニシテ視力ニ妨アルモノ
- 十八 斜視ニシテ一眼直視スルトキ他眼ノ角膜縁内外眦ニ違スルモノ
- 十九 近視
- 二十 視力之弱及夜盲
- 二十一 失明
- 二十二 耳聾缺亡、慢性重聽、聾
- 二十三 鼻畸形ノ著大ナルモノ
- 二十四 鼻腔、前頭竇、上頰洞ノ慢性潰瘍
- 二十五 口内惡性潰瘍、唇頰瘻
- 二十六 唇又ハ齒牙ノ疾病缺損ニシテ咀嚼ニ妨アルモノ
- 二十七 口蓋ノ破裂、缺損、穿孔
- 二十八 舌若クハ唾腺ノ腫瘍、肥大缺損又ハ扁桃腺ノ腫瘍、肥大ニシテ其著大ナルモノ及唾癢
- 二十九 啞、聾啞
- 三十 喉頭及氣管ノ畸形並ニ其慢性病
- 三十一 食道狹窄
- 三十二 斜頸及脊梁ノ畸形ニシテ運動ニ妨アルモノ
- 三十三 胸廓畸形ノ著大ナルモノ
- 三十四 肺、胸膜ノ慢性病
- 三十五 心臟、心袋ノ慢性病
- 三十六 腋臭及足汗ノ惡臭甚シキモノ
- 三十七 骨盤畸形ノ著大ナルモノ
- 三十八 歇兒尼亞
- 三十九 慢性脱肛、痔瘻又ハ著大ノ痔核ニシテ定期性出血、膿潰等アルモノ
- 四十 尿癭、尿石及尿道畸形
- 四十一 辜丸、副辜丸ノ慢性炎、肥大及辜丸尿管輪中ニ在テ疼痛ヲ發スルコトアルモノ
- 四十二 四肢ノ麻痺、削瘦、短縮、彎曲假關節
- 四十三 關節畸形
- 四十四 腕臼若クハ習癖脱臼又ハ關節癱軟
- 四十五 拇指若クハ示指又ハ他ノ三指ノ爪甲全缺
- 四十六 陸軍兵ニ在テハ刺指又ハ指ノ癒著及小指末節ヲ除クノ他指節ノ強剛
- 四十七 陸軍兵ニ在テハ環指若クハ小指ノ末節ヲ除クノ他一節以上又ハ環指小指共ニ一節以上ノ缺損
- 四十八 海軍兵ニ在テハ

諸指一節以上ノ缺損 四十八 足ノ畸形 四十九 陸軍兵ニ在テハ大趾ハ一節以上他趾
 ハ二趾以上ニシテ一節以上ノ缺損 海軍兵ニ在テハ諸趾一節以上ノ缺損 五十 刺趾又
 ハ趾ノ著大ナル彎曲

第五條 前條各項ノ疾病畸形ト雖モ其經症ニシテ服役シ得ヘキモノハ合格ト爾餘ノ疾病畸
 形ニシテ服役シ得ヘカラサルモノトシ認ムルトキハ不合格トス

高等中學校醫學部ノ學科及其程度

第一條 高等中學校醫學部ノ學科ハ英語、動物學、植物學、物理學、化學、解剖學、組織
 學、生理學、藥物學、病理學、外科病理學、內科學、外科學、眼科學、產科及婦人科學
 、裁判醫學、衛生學及體操トス

第二條 高等中學校醫學部ノ修業年限ハ四箇年トス

第三條 高等中學校醫學部ニ於テハ四級ヲ設ケ每級ノ授業期限ヲ一年トシ一年內ニ於テハ

凡四十週授業スヘキモノトス

第四條 高等中學校醫學部ノ各學科授業ノ時數凡左ノ如シ

英語	第一一年	第二二年	第三三年	第四四年
動物學	三			
植物學	三			

物理學	五	一		
化學	四			
解剖學	六			
組織學	三			
生理學	三			
藥物學	三			
病理學	三			
外科病理學	三			
內科學	四			
外科學	二			
眼科學	二			
產科及婦人科學	二			
裁判醫學	一			
衛生學	三			
體操	三			
計	三〇	三〇	三〇	三〇

第五條 高等中學校醫學部ノ各學科ノ程度左ノ如シ

○英語 講讀 翻譯 ○動物學植物學 醫科動物植物學 ○物理學 理論 實驗 ○化學

理論 實驗 ○解剖學 理論 實習 ○組織學 理論 實習 胎生學理論 顯微鏡用法 ○生理學 理論 ○藥物學 理論 處方學 調劑實習 ○病理學 理論 病理解剖學 ○外科病理學 理論 ○內科學 理論 精神病學 小兒病論 診斷學 臨床實習 下科學 理論 皮膚病及梅毒病論 繃帶學 醫用器械學 手術論 臨床實習 ○眼科學 理論 臨床實習 ○產科及婦人科學 理論 臨床實習 ○裁判醫學衛生學 理論 ○體操 兵式體操

第六條 高等中學校醫學部ノ第一年級ニ入ルコトヲ得ヘキモノハ品行端正身軀健康年齡滿十七年以上ニシテ尋常中學校ヲ卒業シタルモノ若クハ之ニ均シキ學力ヲ有スルモノトス 第二年級以上ニ入ルコトヲ得ヘキ者ハ品行身體年齡ノ資格前項ニ準シ其級ノ科程ヲ修メ得ヘキ學力ヲ有スルモノトス

第七條 高等中學校醫學部ニ於テハ第四年級ノ學年試業ヲ終ヘタル後更ニ全科ノ課目ニ就キ卒業試問ヲ行ヒ合格ノ者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ 附設藥學科ノ學科及其程度

第一條 高等中學校醫學部ニ藥學科ヲ附設スル場合ニ於テハ此學科及程度ニ依ラシムルモノトス

第二條 高等中學校醫學部藥學科ノ學科ハ英語、動物學、植物學、物理學、化學、分析、生藥學、製藥學、調劑學、藥局方及體操トス

第三條 高等中學校醫學部藥學科ノ修業年限ハ三箇年トス

第四條 高等中學校醫學部藥學科ニ於テハ三級ヲ設ケ每級ノ授業期限ヲ一年トシ一年內ニ於テハ凡四十週授業スヘキモノトス

第五條 高等中學校醫學部藥學科各學科授業ノ時數凡左ノ如シ

	第一 年	第二 年	第三 年
英語	三	三	三
動物學	三	一	一
植物學	三	九	一〇
物理學	四	六	〇
化學	五	二	〇
動物植物學	三	六	四
藥學	三	三	三
製藥學	三	三	三
調劑學	三	三	三
藥局方	三	三	三
體操	三	三	三
計	三〇	三〇	三〇

第六條 高等中學校醫學部藥學科ノ各學科ノ程度左ノ如シ

- 英語 講讀 翻譯 ○動物學植物學 藥用動物植物學 植物學實習 ○實驗 物理學
- 理論實驗 ○化學 理論實驗 ○分析 定性 定量 應用 ○生藥學 記述 鑑別實
- 習 顯微鏡用法 ○製藥學 理論 製煉實習 ○調劑學 理論 調劑實習 ○藥局方
- 解釋 帝敕藥毒學劇藥極量暗記 ○體操 兵式體操

第七條 高等中學校醫學部藥學科ノ第一等級ニ入ルコトヲ得ヘキモノハ品行端正身壯健康
年齡滿十七年以上ニシテ尋常中學校第三年以上ノ課程ヲ卒リタルモノ若クハ之ニ均シキ
學力ヲ有スルモノトス

第二等級以上ニ入ルコトヲ得ヘキ者ハ品行身壯年齡ノ資格前項ニ準シ其級ノ科程ヲ修メ
得ヘキ學力ヲ有スルモノトス

第八條 高等中學校醫學部藥科學ニ於テハ第三等級ノ學年試業ヲ終ヘタル後更ニ全科ノ課
目ニ就キ卒業試問ヲ行ヒ合格ノ者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

○賣藥規則

明治十年一月第七号布告

第一章

第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ功能書ヲ
附シ販賣スルモノヲ云フ(明治十年第八十九号布告ヲ以テ改正)

第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服量功能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳

ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十一年二十七号布告ヲ以テ管轄廳ノ下八字ヲ削ル)

但免許ヲ受ケタル者ニケ所以上ニ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘ
シ(明治十五年第五十二号布告ヲ以テ但書追加)

第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ檢査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラヌ取扱上失誤ヲ
生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許サルヘシ(明治十一年第二十七号布告ヲ以テ改正)

第四條 第八條ニ記シタル期限中藥味分量用法服量能書ヲ改正セント欲スルモノハ其由ヲ
届出舊鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タル者ハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營
業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結タル約定書トヲ添ヘ其管轄廳ヘ願出免許鑑札ヲ
受クヘシ(明治十年第八十九号及同十一年第二十七号布告ヲ以テ改正)

第六條 賣藥營業者及請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ

第七條 賣藥營業者及請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲サント欲スル
トキハ其由ヲ管轄廳ヘ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スル時ハ必ス之ヲ所持スヘシ

第八條 營業鑑札請賣鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ以テ免許ノ期限トス此
期限ヲ過キ尚免許ヲ得ント欲スルモノハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ

第九條 第八條ニ記シタル期限中第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スル時ハ新鑑札記載ノ
月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ

第十條 免許期限内ト雖モ其製藥第三條ニ掲クル所ノ有害品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノアルニハ直時鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルコアルヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ改正)

第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラル、時ハ其請賣者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス

第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其付細ヲ詳記シテ管轄廳ヘ

届出再ヒ之ヲ願受クヘシ

第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限内其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ

管轄廳ヘ鑑札名前書換ヲ請フヘシ(明治十年第八十九號布告ヲ以テ改正)

第十五條 賣藥營業者廢業シ若クハ禁止セラレタル時營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ

諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

第十六條 賣藥營業者ハ左ノ通税金并ニ鑑札料ヲ上納スヘシ(明治十四年第六六號布告ヲ以テ改正)

賣藥營業稅 藥劑一方ニ付一ヶ年 金貳圓

右鑑札料 藥劑一方ニ付一枚 金貳拾錢

但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受クル者ハ其ヶ所毎ニ本文ノ税金並ニ鑑札料ヲ納ム

ヘシ(明治十五年第五十二號布告ヲ以テ但書改正)

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受クル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ム

ヘシ

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ七月三十一日限後半年分ハ翌年一月三十一

日限鑑札料ハ其都度並ニ管轄廳ニ上納スヘシ

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ前年分七月以後ハ半年分廢業ノ者ハ七月以後ハ全年

分六月以前ハ半年分ヲ納ムヘシ

但第十條ノ有害品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ月割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ(明治十一年第二十七號布告ヲ以テ有害ト改正)

第三章

第二十條

無鑑札ハ鑑札ヲ借受ケ自カラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之レヲ貸ス者又ハ

期限過タル鑑札ヲ以テ自カラ行商シ又行商セシムル者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑一方ニ付五

圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ又ハ期限過タル鑑札ヲ以テ請賣スル者及無鑑札ノ者

ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付拾圓ノ罰

金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケスシテ私ニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經スシテ

無籍ノ妾説ヲ記載シ世人ヲ街惑スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付拾圓以上貳拾五圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十三條 無鑑札ニテ營業スル者又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付廿五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ(明治十四年第二十六号布告ヲ以テ改正)

第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ賣藥ヲ贋造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付五拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十五條 私ニ有毒藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付百圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ルモノアルトキハ事實取犯ノ上相違ナキニ於テハ其實トシテ罰金ノ半高キ與フヘシ

○賣藥取扱手續書及書式

明治十年三月内務省乙第三十二號達

一昨明治八年七月以降當省ニ於テ下附候賣藥鑑札ハ追テ相違候迄免許發賣共當分書替爲願出ニ不及規則公布後相渡候鑑札同様相心得ヘシ

一前條ノ鑑札所持ノモノ營業免許年季ハ其鑑札ニ記載ノ月ヨリ起算スヘシ尤税金ノ儀ハ本年分ヨリ徴收スヘキニ付昨九年マテノ分ハ納メシムルニ及ハス

但鑑札料ハ總テ上納爲致定期納付ノ節勘定帳ニ其區分ヲナスヘシ

一營業鑑札請賣鑒札ハ所持人ノ居家ニ限リ營業ノ權アルモノニ付別戶支店ニ於テハ別ニ其居住人ニ於テ鑑札ヲ所持スルニ非サレハ營業スルヲ得ヘカラス(明治十年七月内務大藏兩省乙第六十五号達ヲ以テ本項追加)

一前條營業鑑札所持ノ賣藥ヲ請賣又ハ行商業致シ居候分來ル四月三十日マテニ悉皆爲願出鑑札交附取計フヘシ

一明治八年七月以降本年一月規則發行前ノ鑑札所持ノ者本年六月迄ニ廢業届出候分ハ特別ノ詮議ヲ以テ本年ニ限リ前半期ノ税金ハ免除スヘシ(同上)

整三尺

寸法同上

許免賣藥營業

幅七寸五分

許免賣藥請賣業

一税金并ニ諸鑑札料納附ノ節ハ上納証ヲ添ユルノミニシテ勘定帳ハ一ヶ年取束ヲ毎年八月三十一日限リ該地差立大藏省租稅局へ進達スヘシ(同上)

但會計年度ノ都合モ有之本年一月ヨリ六月マテノ分ハ別牒ニ製シ八月三十一日限リ該地差立同局へ進達スヘシ

一行商鑑札ハ各管廳ニシテ雛形ノ通之ヲ製シ願人ニ下付スヘシ尤行商スル藥劑ハ其方名ヲ一々鑑札ニ記載スヘシ

但一人ニシテ數人ノ藥劑ヲ行商スル時ハ方數ニ拘ハテス營業者異ナル毎ニ鑑札ヲ別製シテ之ヲ渡スヘシ

一行商鑑札ヲ下附シタル分ハ其都度明細書ニ登記シ置キ每半年分宛別ニ一本ヲ調製シ一月七月ノ兩度内務省ニ開申スヘシ

(諸式書體形畧之)

○藥品營業并藥品取扱規則

明治二十二年三月法律第十號

第一章 藥劑師

第一條 藥劑師トハ藥局ヲ開設シ醫師ノ處方箋ニ據リ藥劑ヲ調合スル者ヲ云フ

第二條 藥劑師トハ其學術試驗ヲ受ケ年齢二十年以上ニシテ内務大臣ヨリ藥劑師免狀ヲ得タル者ニ限ル

第三條 藥劑師免狀ヲ得ントハルモノハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ内務省ニ願出ヘシ

第四條 藥劑師免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第五條 藥劑師免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ藥劑師名籍ニ登錄シ之ヲ公布スヘシ

第六條 藥劑師免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ヲ變換スル等免狀面ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シ免狀書換ヲ内務省ニ願出スヘシ

第七條 書換ノ免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第八條 藥劑師廢業又ハ死亡シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

第九條 藥劑師ニ非サレハ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス

第十條 藥劑師藥局ヲ開設シ又ハ閉鎖シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

第十一條 藥劑師一人ニシテ二箇所以上ノ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス但支局ヲ設クルトキハ別ニ藥劑師ヲ置キ之ヲ管理セシムヘシ

第十二條 藥局ニハ日本藥局方第一表ノ藥品ヲ備フヘシ

第十三條 藥局ニ備付ノ秤量器ハ最モ精確ナルヲ要シ權衡ハ少クモ一「サンキグラム」ヲ定量シ得ルモノヲ備フヘシ

第十四條 藥劑師ハ患者ノ氏名、年齢、藥名、分量、用法、用量、處方ノ年月日及醫師ノ氏名ヲ自記シ又ハ調印シタル處方箋ニ據リ調印スルモノトス但處方箋中疑ハシキ廉アルトキハ其醫師ニ實シ證明書ヲ得ルニアラサレハ調劑スルコトヲ得ス

藥劑師ハ調劑録ヲ備ヘ處方箋ヲ謄寫シ置クヘシ

第十五條 處方箋ヲ受クルトキハ晝夜ヲ問ハス何時ニテモ調劑スヘキモノトス正當ノ事故ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十六條 處方箋中ノ藥品ニ缺乏アルトキハ其醫師ニ通知シテ指彈ヲ乞フヘシ藥劑師隨意ニ之ヲ省畧シ又ハ他藥ヲ代用スルコトヲ得ス

第十七條 毒藥劇藥ノ處方箋ハ藥劑師捺印シテ處方箋ノ日付ヨリ滿十ヶ年間之ヲ保存スヘシ

第十八條 毒藥劇藥ハ一回使用セシ處方箋ニ據リ再ヒ調劑スルコトヲ得ス但特ニ醫師ノ通知アルモノハ此限ニアラス

第十九條 患者ニ與フル藥劑ノ容器又ハ包裝ニハ處方箋ニ據リ内外用ノ別、用法、用量年月、日、患者ノ氏名、藥局ノ地名及藥劑師ノ氏名ヲ記スヘシ

第二章 藥種商

第二十條 藥種商トハ藥品ノ販賣ヲ爲ス者ヲ云フ

第二十一條 藥種商ハ地方廳ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二十二條 毒藥劇藥ハ衛生試驗所又ハ藥劑師製藥者ニ於テ封緘シタル容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第三章 製藥者

第二十三條 製藥者トハ單ニ藥品ヲ製造シ自製ノ藥品ヲ販賣スル者ヲ云フ

第二十四條 製藥者ハ地方廳ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二十五條 毒藥劇藥ハ適當ノ容器ニ納メ之ヲ封緘スヘシ其容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第四章 藥品取扱

第二十六條 日本藥局方ニ記載スル所ノ藥品ハ其性狀、品質、藥局方ノ所定ニ適合スルモノニ非サレハ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

第二十七條 日本藥局方ニ記載セサル藥品ハ其據ル所ノ外國藥局方名ヲ記スヘシ其性狀、品質、該局方ノ所定ニ適シタルモノニ非サレハ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

何レノ藥局方ニモ記載セサル新規ノ藥品ハ衛生試驗所ノ検査ヲ經其試驗成績ヲ記スルモノニ非サレハ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

第二十八條 藥局方中特ニ貯藏法ヲ示シタルモノハ其所定ニ從フヘシ

第二十九條 毒藥劇藥ハ他ノ藥品ト區別シ毒藥ハ鎖鑰ヲ備ヘタル場所ニ貯藏スヘシ

第三十條 毒藥劇藥ハ職業上必要ト認メタル者ヨリ其藥名、量數、使用ノ目的、年月日及住所氏名職業ヲ記シ且捺印シタル證書ヲ差出スニ非サレハ之ヲ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

前項ノ證書ハ其日付ヨリ滿十年間之ヲ保存スヘシ

第三十一條 毒藥劇藥ハ前條ニ記載シタル證書アルモ幼稚ノ者其他不安心ト認ムル者ニハ交付スヘカラス

第三十二條 毒藥劇藥ハ藥品ノ容器又ハ包裝ニ其名稱及販賣授與者ノ住所氏名ヲ記シ毒藥ハ毒字劇藥ハ劇字ヲ付記スヘシ

第三十三條 藥劑師ニ於テ醫師ノ處方箋ニ據リ患者ニ與フル藥劑ハ第三十條及第三十二條ノ手續ヲ爲スヲ要セス

第三十四條 藥劑師藥種商製藥者ノ間ニ於テハ第三十條及第三十二條ニ記載シタル手續ヲ

要セス其藥劑藥種商製藥者タルノ證明書ヲ以テ毒藥劇藥ヲ賣買スルコトヲ得

第三十五條 毒藥劇藥ノ品目ハ内務省令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十六條 藥品ノ容器又ハ包裝ニハ假名又ハ漢字ヲ以テ其藥名ヲ記スヘシ但羅匈語又ハ

他ノ外國語ト併記スルハ妨ケナシ

第三十七條 藥品ノ藥器又ハ包裝ニハ製造者ノ住所氏名ヲ記スヘシ其外國製ニ係ルモノハ

引取人ノ住所氏名ヲ記スヘシ但藥品製造會社ニ在テハ其所在地名及會社名ヲ記スルモ妨

ケナシ

第三十八條 内務大臣ハ監視員ヲシテ藥局及藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視セシムル

コトアルヘシ

監視員ハ巡視ノ際其証票ヲ携帯スヘシ

第五章 罰則

第三十九條 官許ヲ得スシテ藥劑師ノ業ヲ爲シタル者又ハ第十六條第十八條第二十二條第

二十五條第二十六條第二十七條第三十條第一項ニ違背シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰

金ニ處ス

第四十條 第十一條第十四條第一項第十七條第十九條第二十九條第三十條第二項第三十一

條第三十二條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 第六條第八條第十條第十二條第十三條第十四條第二項第十五條第二十一條第

二十四條第二十八條第三十六條第三十七條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下

ノ科料ニ處ス

第四十二條 内務大臣ハ此規則實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布スベシ

但藥種商製藥者取締ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

附則

第四十三條 醫師ハ自ら診療スル患者ノ處方ニ則リ第二十六條第二十七條第二十九條ニ從

ヒ自宅ニ於テ藥劑ヲ調合シ販賣授與スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三十八條ノ監視ヲ受

クヘシ

醫師ハ第三十四條ニ從ヒ醫師タルノ證明書ヲ以テ藥劑師藥種商製藥者ヨリ毒藥劇藥ヲ買

取ルコトヲ得

第四十四條 此規則施行以前ニ於テ内務省ヨリ藥舖開業免狀ヲ受ケタル者ハ藥劑師タルノ

効ヲ有ス

第四十五條 阿片賣買ニ關スル事項ハ明治十一年(八月)第二十一号布告ニ據ル

第四十六條 醫科大學藥學科ノ卒業證書ヲ有シ年齢滿二十年以上ノ者ハ其證書ヲ以テ此規

則第三條ニ據リ藥劑師免狀ノ下付ヲ願出ルコトヲ得此場合ニ於テハ内務大臣ハ試驗ヲ要

セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四十七條 此規則ハ明治廿三年三月一日ヨリ施行ス

第四十八條 明治十三年(一月)第一号布告藥品取扱規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

○藥劑師試験規則

明治二十二年三月内務省令第三号

第一條 藥劑師ヲラント欲スル者ハ此規則ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第二條 藥劑師試験ハ内務大臣ニ於テ毎日二回試験主事者及ヒ試験委員ヲ撰任シテ舉行ス

ヘシ其舉行ノ地及ヒ試験期日ハ六箇月前之ヲ告示スヘシ

第三條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

學說

第一 物理學

第二 化學

第三 植物學

第四 生理學

第五 製藥化學

實地

第一 分析術

第二 藥品鑑定

第三 藥物製煉

第四 調劑術

第四條 試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ヲ試験期日三箇月前ニ内務省宛ニテ地方廳ニ差出

スヘシ地方廳ハ試験期日一箇月前ニ之ヲ取纏メ内務省ニ傳達スヘシ

第五條 試験ニ及第シタル者ニハ試験主事者ヨリ試験委員ト連署シタル及第證書ヲ與フヘ

第六條 受験者ハ試験開場ノ前日迄ニ手数料金五圓ヲ試験主事者ニ納ムヘシ

第七條 受験上不都合ノ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場ヲ命スルコトアルヘシ

第八條 受験中疾病其他ノ事故アリテ試験ヲ完了セサル者及ヒ落第シタル者又ハ退場ヲ命

シタル者ニハ手数料ヲ返付セス

第九條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

○藥劑師試験受験人心得

明治廿三年二月内務省告示第七號

第一條 藥劑師試験ハ當省ヨリ告示シタル試験舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受クル

コトヲ得ヘシ

第二條 藥劑師試験ヲ受ケント欲スルモノハ明治廿二年(三月)内務省令第三号藥劑師試験

規則第四條ニ據リ左記書式ノ願書ヲ居住ノ地方廳ヘ差出スヘシ

第三條 藥劑師試験願書ハ許可ノ指令ヲ付セサルニ付該出願者ハ試験舉行ノ期日四日前ニ

試験地ニ到着シ宿所氏名ヲ地方廳ニ届出ヘシ

願書式

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍

氏名

私儀何年何月何地ニ於テ藥劑師試驗相受度此段奉願候也

右

年月日

氏名印

市長(三府八區長)若クハ町村長(市町村制ヲ實施セサル地方ハ戶長)

內務大臣爵氏名殿

○藥品營業並藥品取扱規則第三十五條ニ依ル毒藥劇藥ノ品目

明治廿二年三月內務省令第五號

毒藥

燐

青酸、稀青酸、青酸加里亞

亞砒酸(白砒石、礬石)、亞砒酸加留漢液(法列兒氏水)

沃度化砒素、沃度砒素液(度納散氏液)、硫化砒素(鷄冠、雄黃、雌黃)

黃色酸化汞(黃降)、赤色酸化汞(赤降)、昇汞(猛汞、ソツヒ)、白降汞、硝酸汞、赤色沃度化汞

猛毒アルカロイド及ヒ其鹽類

アコニチ子、亞刺莫兒比涅、亞篤密必涅、アルチ子、コニ子、エメチ子、比蘇

斯知偶密涅(ユセリ子)、菲沃斯矢亞密涅、莫兒比涅、ナルコチ子、ニコチ子、必魯加兒

必涅、斯篤里幾尼涅、勃拉篤里涅等

齊麥答利涅

ソラーレ(矢毒)

加刺波兒豆、越幾斯篤拉屈篤

揮發苦扁桃油

巴豆油

劇藥

硫酸、粗製硫酸、發烟硫酸

硝酸、粗製硝酸、發烟硝酸

鹽酸、粗製鹽酸

硝酸(王水)

石炭酸、粗製石炭酸

格羅漢酸及ヒ其鹽類

苛性加里及ヒ其滴液

苛性曹達及ヒ其滴液

強安母尼亞水

沃度、沃度丁幾毛兒、沃度仿謨、沃度化加留謨、含糖沃度化鐵、沃度化鐵九貌羅謨(奧蘇)

法律規則

鏡羅謨化樟腦

格魯兒化拔留謨、硝酸拔留謨

格魯兒化留謨、硝酸留謨

吐酒石及其製劑、酸化安知母紐謨、硫化安母知紐謨(金硫)

醋酸亞鉛、炭酸亞鉛、格魯兒化亞鉛、酸化亞鉛(亞鉛)、硫酸亞鉛(亞鉛)、糊單酸亞鉛醋酸鉛(亞鉛)

糖)次醋酸鉛液(鉛醋)、炭酸鉛、酸化鉛

醋酸銅、銅礬(神効)、硝酸銅、硫酸銅安母紐謨(銅礬)、硫酸銅(丹礬)

甘汞、輕粉、銻色沃度化汞、硫酸汞、汞灰散、藍丸

硝酸銀、硝酸銀加硝石

亞硝酸亞密爾

呀 仿及其製劑附コロゲン

把水格魯刺爾

知母爾

結麗阿曹篤

古埤乙涅

咖啡涅

古加乙涅

珊篤寧及其製劑

刺度比爾林

苦扇桃水、杏仁水、老利兒結兒斯水、ハクテ水

錫谷利斯、斑貓、光著及其製劑

麥角及其製劑

印度大麻葉其製劑

寶菱答利斯葉及其製劑

別刺教那葉、根及其製劑

黃若葉、根及其製劑

非沃斯矢亞謨斯葉、子及其製劑

曼陀羅華葉、子及其製劑

耶憐關日葉

魯別利亞葉及其製劑

カビナ葉及其製劑

古魯聖篤實及其製劑

コニエーム草及其製劑

刺苦毛葛留謨及其製劑

候答百兒加液

サヒナ油

揮發芥子油

阿片及其製劑

アコニツト根(胡雙蒟、烏類)及ヒ其製劑

藜蘆根

吐根及ヒ其製劑 附托勿兒氏散

葯刺巴根

葯刺巴脂及ヒ其製劑

古爾矢屈謨子、根及ヒ其製劑

サバシルラ子

香水籠子及ヒ其製劑

巴豆

加刺拔兒豆

藤黃

日本産大茴香

○藥品其他検査手数料

明治十七年十月内務省甲第二十七号告示

一藥品

一種ニ付筒數ノ多寡ニ拘ハラズ金五拾錢 印紙ヲ貼付スルモノハ別ニ一箇ニ付金壹圓ヲ徴シ印紙貼付ノ上仍ホ告示箋ヲ請求スルモノハ一葉ニ付金貳

拾錢ヲ徴ス(明治二十二年内務省告示第 三十二號ヲ以テ本項ヲ改正) 左ノ各項手数料ハ壹圓毎ニ徴收スルモノトス

一飲氷及氷雪

飲料適否鑑定

金拾錢乃至五拾錢

一乳汁

厚薄ナル 理學的検査并

金五拾錢乃至壹圓

一酒類

定性分析

金貳拾錢乃至壹圓

一飲食物

全

全

一大氣及有害性瓦斯類

定性定量ニ拘ラス

金壹圓乃至五圓

食器中有害性金屬

定性分析

金貳拾錢乃至壹圓

一衣服料

定性分析

金五拾錢乃至三圓

一礦泉

定性分析

金五拾錢乃至三圓

定量分析

金壹圓乃至拾圓

一顏料

定性分析

金貳拾錢乃至貳圓

一玩具其他著色中有害性色質

全

一 化學製品

定性分析

金貳拾錢乃至壹圓

一 礦泉及金屬

定量分析

金五拾錢乃至五圓

一 警察及裁判關係諸品

檢査ノ難易及之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ

金壹圓乃至拾圓

一 前各項ノ諸品ハ其檢査ノ難易之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ相當ノ手数料ヲ徴收スヘシ

一 右諸品時日ヲ限リ檢査ヲ乞フモノハ試驗所ノ都合ニヨリ之ヲ許可スルコトアルヘシ然ルト

キハ普通檢査手数料ノ五倍以内増テ徴スヘシ

明治廿六年六月内務省告示第二号

○藥品檢査印紙貼用方

衛生試驗所ニ於テ醫藥用ニ適スヘキモノト認メタル藥品ニハ左ノ檢査印紙ヲ貼用ス

但當分ノ内元衛生局試驗所檢査印紙ヲ取交貼用ス

小形印紙(圓形)

右印紙大中小最小ノ四種トス

○藥用阿片并賣買ニ製造規則

明治十一年八月太政官第二十一号布告

藥用阿片賣買並製造規則

第一條 阿片ノ藥用及ヒ製造ハ藥用品ニ限リ此規則ニ依テ之ヲ許可ス

第二條 藥用阿片ハ内國產若クハ外國產ヲ論セス總テ内務省ニ於テ其品位ヲ定メテ之ヲ買

上ケ地方廳ヲシテ阿片印シ賣時許藥舖ニ之ヲ拂下ケシムヘシ(明治二十年勅令第五十二号ヲ以テ改正)

第三條 地方廳ヨリ拂下ケル阿片ハ量目一匁ヲ以テ一器トシ每器衛生局試驗所ノ印紙ヲ貼

附スルモノトス(全上)

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置ヲ度リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥舖ノ身元人物ヲ選ミテ

内務省ニ稟議シ鑑札ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交付スヘシ

但廢業ノ者アル節ハ鑑札ヲ内務省ニ返納スヘシ

第五條 時許鑑札ヲ受ケタル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管內ノ公私病院醫師藥舖一級

ニ報告スヘシ

但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速ニ報告スヘシ

第六條 時許鑑札ヲ受ケタル藥舖ハ其店頭ニ時許藥用阿片賣捌所ト大書シタル看板ヲ掲ケ

置クヘシ

第七條 時許ヲ受ケタル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ毎年兩度地方廳ニ申立テ其拂下ケ

ヲ請フヘシ但缺乏ノ節ハ臨時拂下ケヲ請フコトヲ得(全上)

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般病院ニ於テ藥用阿片ヲ要スルトキハ其量目並ニ其住所姓名

及年月日(病院ハ其名稱及院長若クハ副長)ノ姓名ヲ記シ調印シタル證書ヲ以テ時許藥舖

ニ就キ之ヲ購求スヘシ時許藥舖ニ於テハ之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四十匁ヲ超ヘカラス

但病院及醫師ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖相互ニ賣買ス

ルトハ妨ケスト雖トモ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目一度ニ八匁ヲ超ユヘカラ

第九條 凡テ内外國人其醫師ノ處方箋ヲ持參シタル者ノ外ハ特許藥舖并ニ一級藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受並ニ壹匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住所姓名並ニ壹匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出スヘシ尤モ壹匁以上ノ分ハ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

但管轄廳ハ其一通ヲ內務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半必シモ前條明細表ヲ差出スヲ要セスト雖モ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及培養採取製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ內務省ノ免許證札ヲ受クヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ內務省ノ買上ケヲ願フヘシ右買上ケ受クルノ外決シテ外國人民ニ販賣スルヲ許サス

但內務省ニ於テ其品位藥用ニ適セサル者トスルトキハ地方廳ヨリ此旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其廳ニ預リ置クヘシ

第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲ノ豐凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖モ其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ該縣主用ノ性分即チ「モルヒチ」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 內務省ニ於テ買上ケ及ヒ拂下ケル所ノ阿片ノ「モルヒチ」含量ハ買上ケ品ハ百分中ニ九分以上拂下ケ品ハ百分中ニ十分以上ヲ含有スルモノトス

第十六條 此規則ニ違犯スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片買買若クハ製造ヲ禁シ其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

○病死体解剖

明治九年七月內務省三府

病死身解剖ノ儀ハ醫術進歩ノ爲メ緊要ノ事柄ニ付双方熟議ノ上ハ區戶長或ハ醫術取締へ屬置患部ノ剖視不苦候條此旨相違候事

○變死体解剖

明治十年二月太政官第貳號布告

變死ニ係ル屍ヲ警察官吏檢査スル時ニ於テ解剖ヲ行ハサレハ其致命ノ原因ヲ確知シ難キ旨醫師申立ル時ハ檢事檢事派出ナキ地方長官ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖檢査セシムルヲ得

○刑死体解剖

明治十八年七月內務省甲第貳拾五號達

監獄則ニ揭クル所ノ刑死者及死者ニシテ親族故舊其遺骸ノ下付ヲ請フモノナキトキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖ノ費用ニ供スルヲ得此旨相違候事
但屍體剖視ノ後ハ縫理シテ原體ニ復シ不都合無之檢取計ハシムヘシ

文官傷疾疾病等差例

明治十八年三月二十七日大政官第十六号

公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ

官吏恩給令附則第五條ニ掲クル各項ニ該當スルモノニ等差ヲ付スルノ概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼昏昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スルモノハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アルモノハ第五項其輕キモノハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサルモノハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ廢スルモノハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタルモノハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ廢管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 膀胱爾尻亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十三條 陰莖或ハ睪丸ヲ全失スルモノハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スルモノ偏睪丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條 頸項背腰諸筋運用ヲ妨クルモノハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スルモノハ第一項トス

第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間關節作用ヲ廢スルモノ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス

第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スルモノハ第四項トシ五指癒着若クハ強硬等ノ爲メニ把握操持ノ用ヲ廢スルモノハ第五項トス

第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモノ尚把握ノ用ヲナシ得ルモノハ第六項トス

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スルモノ或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ヲ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スルモノハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間何レノ部位ヲ論セス第三項トス

三項トス

法律規則

第二十三條 股關節ヨリ踵關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタルモノハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第二十四條 跗骨ヨリ蹠骨ニ至ルノ部ヲ失スルモノハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スルモノハ第六項トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサルモノハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キモノハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアルモノハ第六項トス

第三十一條 墓地及埋葬取締規則施行方法細則標準明治十七年十一月內務省乙第四十号達 府縣

第一條 墓地ハ從前許可セラレタル者ニ限ル
但止ム事ヲ得サル事情アリテ之レヲ取廢メ又ハ新設スル場合ニ於テハ地方廳ニ願出ノシ

第二條 墓地ヲ新設スルハ國道縣道鐵道大川ニ沿ハス人家ヲ隔ルコト凡ソ十六間以上ニシテ土地高燥飲用水ニ障ナキ地ヲ撰ムヘシ

第三條 墓地ハ種族宗旨ヲ別タス其町村ニ本籍ヲ有シ若クハ其町村ニ於テ死シタルモノハ何人ニテモ之ニ葬ルコトヲ得其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス

但死刑ニ處セラレタル者ハ墓地ノ一隅ヲ區劃シテ其内ニ埋葬スルモノトス

第四條 墓地ノ周圍墓地ニ非ル地トノ境界ヲ云フニハ樹木ヲ栽ユヘシ墓地ノ内ニハ一丈以上ノ樹木塀塙ヲ存スヘカラサルモノトス

但從前ヨリ現存スル者ハ此限ニアラス

第五條 墓地ハ清潔ヲ旨トシ掃除及修繕ヲ怠ルヘカラス

第六條 火葬場ハ人家及人民輻湊ノ地ヲ隔ル凡ソ百二十間以上コシテ風上ニ位セサル地ヲ撰ヒ火爐烟筒ニ備ヘ臭煙ヲ防クノ裝置ヲナシ且周圍ニ塀塙ヲ設クヘシ

但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナルトキハ格別ナリトス

第七條 火葬ハ成ルヘク日没後之ヲ行ヘシ

第八條 擴穴ノ深サハ六尺以上タルヘシ若シ土地ニヨリ六尺ニ至リ難キモノ及ヒ火葬ノ遺骨ヲ埋藏スルモノハ格別ナリトス

第九條 墓地火葬場ニハ必ス管理者ヲ置キ其姓名ハ區役所又ハ戶長役場ニ届ケ置クヘシ

醫師ノ治療ヲ受クルノ猶豫ナクシテ死亡シタルモノヲ埋葬又ハ火葬セント欲スルキハ醫師ノ檢察ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許証ヲ乞フヘシ妊娠四ヶ月以上ノ死胎ニ係ルキハ醫師若クハ産婆ノ死産証ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許証ヲ乞フヘシ
 變死ニ係ルキハ立會醫師ノ檢察書ニ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ
 囚徒ノ死屍ヲ引取埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ獄醫ノ死亡証書寫ニ司獄官ノ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ

第十二條 區戶長ハ前條ノ届書証書ヲ領收スルコアラサレハ埋火葬ノ認許証ヲ與フヘカラ

第十三條 管理者ハ葬主ヨリ領收シタル區戶長ノ認許証ヲ編纂シ毎三ヶ月所轄警察署ノ檢閱ヲ受ケテ之ヲ區役所又ハ戶長役場ヘ差出スヘシ

第十四條 管理者ハ墓地ノ繪圖及墓籍ヲ調製シ置クヘシ

第十五條 (明治十九年内務省甲第五號達ヲ以テ本條削除)

明治九年二月内務省達乙第拾三號

○醫師患者死亡届

管内醫師施治ノ患者死亡スルキハ左ノ書式ニ準シ遺漏ナク區戶長ヲ經テ管廳ヘ爲届出半ケ年宛取纏メ二月ヲ限リ當省ヘ可差出此旨相違候事 十六年乙第五八号ヲ以テ届書ハ當省ヘ差出スニ不及旨ナ達ス又戶長ノ下(若クハ醫務取纏)ハ十二年乙第五拾六号直達ニ依リ消滅ニ付除去ス

死亡届料紙半紙ニツ折

病名 年號月日死

何縣何國何郡何町(九年乙第百三拾九号)
 何某父母兄弟妻子
 何業何聽 姓 名

右ハ私施治ノ患者ニ候處死去候間此段御届申上候也

何縣何大區何小區何村番地

年號月日

醫師 姓 名

何縣參事 何某殿

○患者死亡届差出順序

明治九年四月内務省達乙第拾四號

當省本年乙第拾三號ヲ以テ患者死亡届ノ義相違候處右届書差出方順序醫師ヨリ直ケニ差出候テハ數醫ノ治療ヲ受ケタル患者死亡ノ節醫師各自届出重復シ或ハ互ニ讓リ合等附相成候義ニ可生ニ付主任ノ醫師ハ必ラス届書ヲ死者ノ家人ニ付與スヘリ家人ハ必ス之レヲ請求シテ該病家ヨリ(區戶長)ニ爲差出候様可取計此旨更ニ相違候事 (同上(戶長)ノ下、或ハ醫務取纏)ノ五字ヲ除ク

○死亡届書ニ職業記載方

明治廿年十月内務省達乙第百廿四号

本年二月乙第拾三號達(三府ヘハ同月分相違候)死亡届ノ義往々書式ニ照準セス職業ヲ記載セサル書面有之元來死亡届ハ土地ト職業ニ原ツケル疾病ニ異同多少アルヲ查出シ豫防法講究ノ用ニ供候條向復例ヘハ大工ハ大工鍛冶ハ鍛冶其他總テ本人ノ職業ヲ記載スヘリ此旨更

相違候事
但シ何ヘハ大工ノ家族モ他業ヲ營居者ハ本人ニ職業ヲ記載シ若シ本人無業ナレハ無業ト
記シ候義ト可相心得事

明治十四年十二月十九日布告第十七号同二
十三年十月八日法律第百二号ニテ改正追加

○刑法附則摘録

第一章 主刑執行

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ト申スル者ハ醫師及ヒ繼妻ヲシテ之ヲ検査セシメ
果シテ懷胎ナルトキハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ
司法卿ノ命令ヲ受ケテ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付
スルコトヲ得

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル証人醫師鑑定人通辨人翻譯人ニ給與スヘキ日當旅
費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 証人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五拾錢トス但止宿料ヲ給スル場合ニ於テハ此日
當ヲ給セス

第四十九條 乙醫師鑑定人通辨人翻譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五拾錢乃至金五圓ノ範圍
内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第四十九條 丙証人醫師鑑定人通辨人翻譯人ノ旅費ハ海陸滿壹里毎ニ付金拾錢トス通路兩
線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

第四十九條 丁前條ニ記載シタル者ノ止宿料ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一
日金五拾錢トス

第五十條 証人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非ラサレハ之ヲ給與セス

第五十一條 証人ノ日當ヲ以テ生業トスル者若シ法律第百九十九條ニ從ヒ償金ヲ要求スルトキハ
旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給與スルコトヲ可シ

第五十二條 解劊合密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給
與スヘシ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪
第三章 靜謐ヲ害スル罪
第百七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解劊分拆又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故
ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第百八拾條 裁判所ヨリ証人トシテ証據ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ
肯セサル時ハ又前條ニ同シ

第百八拾一條 傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ検査
シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルコトヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以

上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四章 信用ヲ害スル罪

第五節 免狀鑑札及ヒ疾病証書ヲ偽造スル罪

第二百十五條 公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ証書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師屬託ヲ受ケテ其詐偽ノ証書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條 陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ証書ヲ偽造シテ行使シタル者及ヒ屬託ヲ受ケテ其詐偽ノ証書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各々一等ヲ加フ

第六節 偽証ノ罪

第二百十八條 刑事ニ關スル証人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ偽証ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽証シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條 偽証ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ偽証者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條 被告人ヲ陷害スル爲メ偽証ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一 重罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ三月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三 違警罪ニ陷ラシムル爲メ偽証シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條 偽証ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽証ノ罪發覺シタル時ハ偽証ノ者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽証ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽証ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルコトヲ得但減シテ前條ノ偽証ノ刑ヨリ下クコトヲ得ス

第二百二十二條 偽証ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陷ル、ノ目的ヲ以テ偽証ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行

セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽証ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ

重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條 鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル時ハ

前數條ニ記載シタル偽証ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽証又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメ

タル者ハ又偽証ノ例ニ同シ

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ

自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三編 身体財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身軀ニ對スル罪

第十二節 誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百六十條 醫師樂商繼婆又ハ代言人辯護人代書人若シハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委

託ヲ受ケタル事ニ因テ知り得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月

以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス但シ裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實

ヲ陳述スル者ハ此限ニアラス

○民法証據編摘錄

明治二十三年三月廿七日法律第二十八号中

第一章 判事ノ考覈

第六條 判事ハ左ノ諸件ニ依リ主張セラレタル事實ノ確實ヲ得タルトキハ自己ノ考覈ニ依

リテ等ヲ決スルコトヲ得

第一 當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取條等物並ニ証書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二 臨檢

第三 鑑定

第三節 鑑定

第十一條 法律ニ於テ鑑定ニ依ル可キ旨ヲ定メタル場合ノ外判事ハ等ノ判決ニ付キ特別ノ

知識ヲ要スルトキハ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ

助ケシムル爲メ鑑定人ノ報告ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

判事ハ鑑定人總員一致ノ説ト雖モ之ニ從フ義務ナシ

○民事訴訟法摘錄

明治二十三年三月廿七日法律第二十九號

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第六節 証人

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ

証言スル義務アリ

第二百九十條 官吏公吏ハ退職ノ後ト雖トモ其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り証人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ証言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且証人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 証人ノ申出ハ証人ヲ指名シ及ヒ証人ノ訊問ヲ受リ可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 証人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 証人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三 証人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ヲ証人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ關勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ其他ノ期日ヲ定ムル求ヲ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル証人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

証人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

証人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 証人其出頭セサリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辨解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

証人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族証人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中心其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ証言ヲ拒ムコトヲ得

法律規則

トキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ任フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ証言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ク可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ証言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏公吏又ハ官吏公吏タリシ者カ其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルト

第二 醫師藥商總邊辨護士公証人神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタ

ルニ因リテ知リタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テ答辨カ証人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ

新道ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テ答辨カ証人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生

セシム可キトキ

第五 証人カ其職業又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辨スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 証人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左

ノ事項ニ付キ証言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 証人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ條等ノ權利關係ニ關シタル行為

前條第一號第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ証言ヲ拒ムコ

トヲ得ス

第三百條 証言ヲ拒ム証人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ニ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕

ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ証言ヲ拒ミタル証人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ

通知ス可シ

第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲

ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ

所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ証言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之

ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用

ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ屬託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一号乃至

第三百号ノ關係アルトキハ其証人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ証人ノ訊問前ニ之ヲ爲スコシ此時限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主

張スルヲ得サリシコトヲ疎明スルトキニ限り其証人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疎明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言

スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條 各証人ニハ其携帯ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人連ナラサルコトヲ判

然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキ

ハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 証人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ

欺秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ欺秘セス又何事

ヲモ附加セサリシ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽証ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム証人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤチ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三号並ニ第四号ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕

スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三号並ニ第四号ノ場合ニ於テ

ハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲スコキコトヲ申立テラレタルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 証人訊問ハ後ニ訊問ス可キ証人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其氏名年齢身分職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ牽連シテ供述セシムヘシ
證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尚ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用ルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ得
當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メ其必要ナリトスル問ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得
發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之レヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載スヘシ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

- 第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ
- 第二 證人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所ハ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル証據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條第二百九十五條第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル証人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ト其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條 証人ヲ申出テタル原告若シハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ放棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り之ヲ放棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各証人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲メニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得

舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ證人ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ撰定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲スコキ選定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術技藝若シハ職業ニ常ニ従事スル者又ハ學術技藝若シハ職業ニ従事スル爲ニ公ニ任命セラレ若シハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲スコキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タル義務ナキトモ雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡スコシ但シ其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見ガ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辨論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得
此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一号並ニ第二号ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定ス可キトキハ証人ニ付テノ規定ヲ適用ス

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之レヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ証人若シハ鑑定人ノ訊問又ハ檢証ヲ申立ツルコトヲ得

○民事訴訟費用法

明治二十三年八月十五日法律第六十四号

第二條 訴訟其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿ラサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿ラサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料電信料及運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第二百七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 証人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス
第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定ヲ爲スニ付別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五錢トシ
証人鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス

第十三條 當事者証人鑑定人及通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス
通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢証ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滞在費ハ証人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非証事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ除ク外
前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非証事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○刑事訴訟法摘錄

明治二十三年十月六日法律第九十六號

第三編 犯罪ノ捜査記許及ヒ豫審

第三章 豫審

第三節 証據

第九十條 被告人ノ自白官吏ノ檢証調書証據物件証人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第六節 証人訊問

第九十五條 証人ノ呼出狀ニハ其氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第九十六條 証人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第九十七條 証人ト爲ル可キ者豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求スヘシ

第九十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外証人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直ニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ屬託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引ニ付テモ亦同シ

第百十九條 豫審判事ハ証人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辨解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第百二十條 証人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

第百二十一條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第百二十二條 豫審判事ハ証人ナシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百二十三條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

- 第一 民事原告人
- 第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖トモ亦

同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第百二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

- 第一 十六歳未満ノ幼者
- 第二 知覺精神ノ不十分ナル者
- 第三 瘡痍者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其証憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ証言ヲ拒ムコトヲ得

- 第一 官吏公吏又ハ官吏公吏タリシ者其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ
- 第二 醫師藥商總娼辯護士辯護人公証人神職僧侶其身分職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルトキ

証言ヲ拒ム可キ者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

第百二十六條 証人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見

ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ屬託シテ之ヲ爲ス可シ

第百二十七條 証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ証人ト他ノ証人ト又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百二十八條 豫審判事ハ証人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得若シ証人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ証人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百三十條 皇族証人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第百三十一條 豫審判事ハ証人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

証人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載スヘシ

調書ニハ豫審判事書記及ヒ証人共ニ署名捺印スヘシ若シ証人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百三十二條 豫審判事ハ証人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得若シ証人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

第百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ觸ケタル証人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第百三十四條 証人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得

第七節 鑑定

第百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死体ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死体ヲ解剖シ若シハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第百三十六條 鑑定ニ付テハ第百十五條第百十八條乃至第百二十一條第百二十三條乃至第百二十五條及ヒ第百二十八條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ

得ス

第三百二十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲スコシ其宣誓ハ第二百二十二條ノ式ニ從フ

第三百二十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢察ノ見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡スコシ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

第三百二十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記スコシ若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載スコシ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第三百四十一條 豫審判ハ旅費日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第三百四十四條 地方裁判所檢察及ヒ區裁判所檢察ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナリ其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコト

ヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

証人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

第四編 公判

第一章 通則

第三百八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ在ラス

辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲スコシ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スコシ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辨論ヲ爲スコシ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲スコシ

第三百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル証人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル証人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其証人鑑定人ヲ呼出ササルトキ証人鑑定人呼出ヲ呼ケ出頭セサルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較スコキトキハ檢察其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第九十條 第一百五條以下ノ規定ハ公判ノ証人ニ第三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第九十五條 証人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ

其証人又ハ鑑定人供述ハ裁判所書記之ヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本條ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第二百五十八條 控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス

第一審ニ於テ訊問シタル証人又ハ鑑定人ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリトセサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得

○コツホ氏結核病治療液取扱心得 明治二十四年二月十九日内務省告示第四号

普魯士國教授ロベルト、コツホ氏ノ發明ニ係ル結核病治療液ハ明治廿二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第七條第貳項ニ據ルモノトス

○藥劑師廢業又ハ死亡届心得 明治二十四年四月七日内務省令第一號

明治二十二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第八條后書ニハ免狀ヲ添付スヘク其死亡ニ係ル届出ハ戸主之ヲ爲スヘシ戸主未定又ハ不在ナルトキハ死者ノ相續者、相續者未定

又ハ不在ナルトキハ其財産ヲ管理スル者之ヲ爲スヘシ

(參照)

法律第十號藥品營業並藥品取扱規則(明治廿二年三月十六日官報抄録)

第八條藥劑師廢業又ハ死亡シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

○コツホ氏結核病使用心得

明治二十四年五月二日内務省令第三號

コツホ結核病治療液(テユベル)ハ官立府縣立病院ニ限り之ヲ使用スルコトヲ得其他病院若クハ醫師コシテ相當ノ準備アル病室ヲ有スルモノ之ヲ使用セントスルトキハ豫メ地方長官ヲ經由シテ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ内務大臣ハ中央衛生會ノ審議ヲ經テ之ヲ認可シ若クハ認可セサルコトアルヘシ該液ハ外來患者ニ使用スルコトヲ得ス

地方長官ハ該液ノ使用ニ關シ特ニ監督者ヲ派出シテ臨檢セシムルコトアルヘシ該液ヲ使用シタル者ハ左ノ書式ニ依リ其使用終結ニ至リタル患者ノ治療表ヲ製シ毎月内務大臣ニ報告スヘシ

本令第五項第五項ニ違背シタル者ハ貳拾圓以内ノ罰金ニ處ス

既 在 症	結核病治療液治療表	年月日調	醫師住所氏名印
	第 号患者病名		職業如何某 年 齡

法律規則

注入ノ月 日及其量	反應諸症	成績

既往ノ病歴注入前ノ現症及ニ結核菌ノ有無ハ既往症及現在症ノ欄下ニ注入後ノ體温、呼吸、脈搏ノ狀況、惡寒、戰慄、頭痛、惡心、發疹、倦怠等ノ諸症ハ反應諸症ノ欄下ニ體量ノ増減及ヒ全治、輕快、無効、死亡ハ成績ノ欄下ニ記スヘシ

○地方衛生會規則

地方衛生會規則

明治二十四年八月十七日勅令第百七十四號

- 第一條 地方衛生會ハ府縣知事ノ監督ニ屬シ警視總監府縣知事ノ諮詢ニ應ニテ其府縣内公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ヲ審議ス
- 第二條 地方衛生會ハ府縣内公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ニ就テハ警視總監府縣知事ニ建議スルコトヲ得
- 第三條 地方衛生會議事規則ハ該會ニ於テ之ヲ議定シ府縣知事ノ認可ヲ請フヘシ
- 第四條 地方衛生會ニ職員ヲ設クルコト左ノ如シ
會長 府縣知事ヲ以テ之ニ充ツ

委員

- 府縣書記官 一人
- 警部長 一人
- 但東京府ハ警視廳警務局長
- 府縣參事官 一人
- 名譽職府縣參事會員 四人
- 府縣廳所在地ノ郡長又ハ市長 一人乃至五人
- 醫師 一人
- 獸醫 一人
- 化學家 一人

臨時委員

書記 府縣屬ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 會長ハ本會議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ其議定セシモノヲ警視總監府縣知事ニ具申ス

第六條 會長事故アルトキハ書記官之ヲ代理シ書記官事故アルトキハ開會當日出席委員ノ互選ヲ以テ會長ヲ定メ其事務ヲ代理セシム

第七條 委員中府縣參事官醫師獸醫化學家臨時委員ハ府縣知事之ヲ命ス但獸醫及化學家ハ

法律規則

百七十五

其人ヲ得サルトキハ缺員ト爲スコトヲ得

名譽職府參事會員ハ改選毎ニ郡市部各二名ヲ互選シ府知事之ヲ命ス

第八條 官吏ノ資格ヲ以テ委員トナリタル者ノ旅費ハ其所屬廳ノ經費ヨリ支給シ市長ノ旅

費ハ市役所ヨリノ經費支給シ其他ノ委員ニ係ル手當並旅費ハ府縣稅ヨリ支給スルヲ得

第九條 書記ハ會長ノ指揮ヲ受ケ職事ヲ筆記シ及文書計算ニ從事ス

第十條 府縣制ヲ施行セサル地方ニ於テハ名譽職府縣參事會員ノ職務ハ府縣會常置委員ヲ

以テ之ニ充ツ此場合ニ於テハ常置委員改選毎ニ該員中ニ於テ互選シ府縣知事之ヲ命ス

明治廿五年五月五日印刷
明治廿五年四月廿九日出版

編纂者兼發行者

岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番邸

北村長太郎

印刷者

岡山縣岡山市大字弓之町六十七番邸

加茂吉郎

發賣所

岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番邸

細謹舎

印刷所

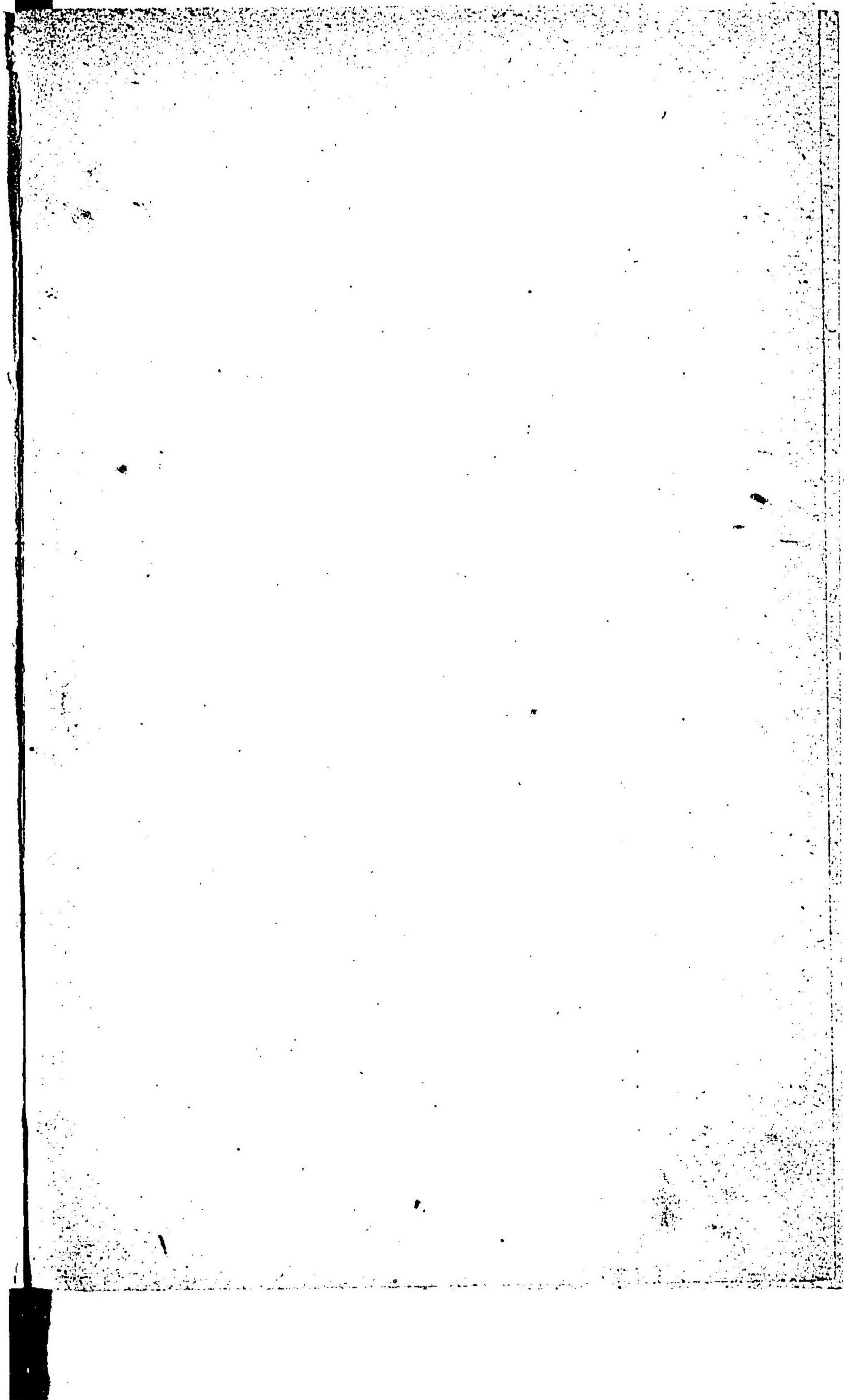
岡山縣岡山市大字西中山下三十二番邸

向陽社

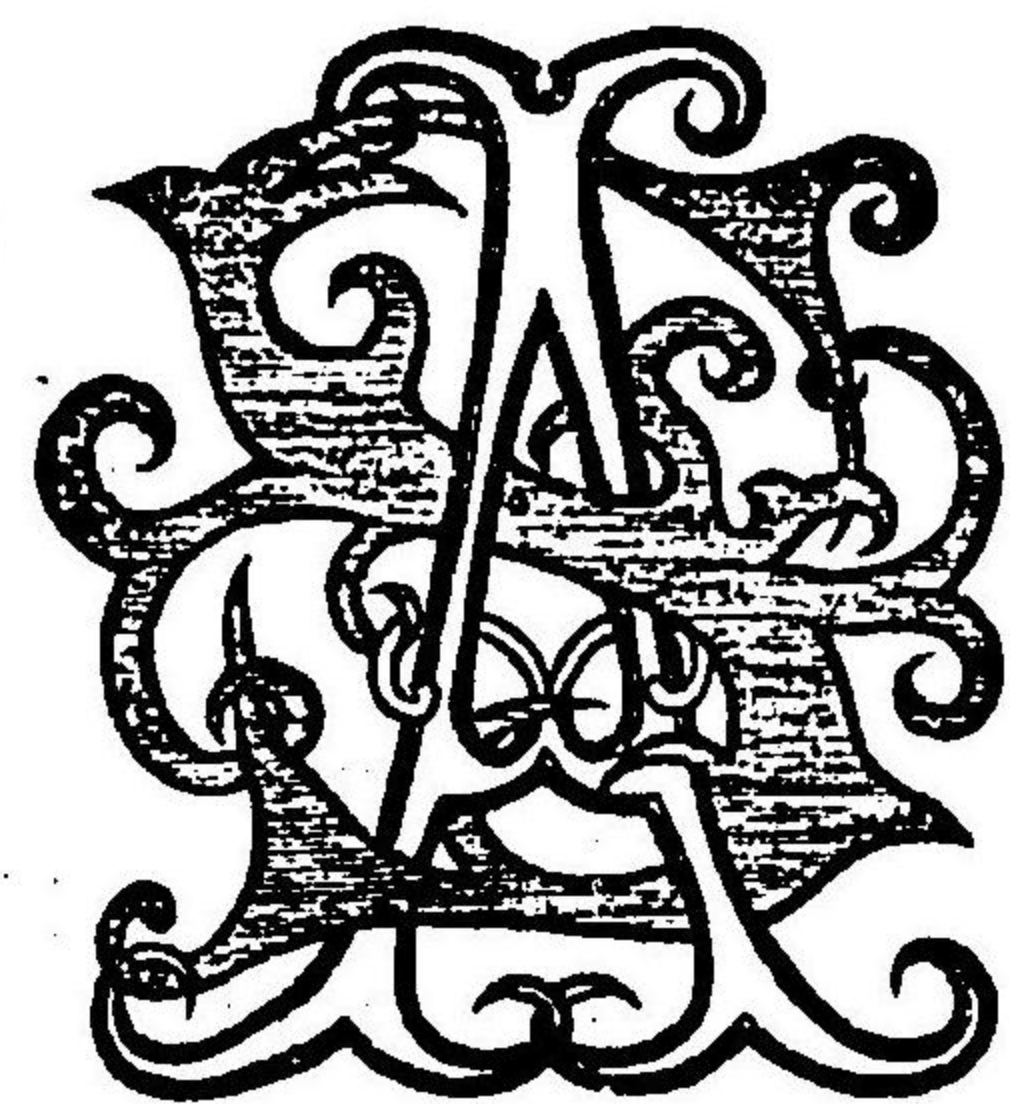
製本所

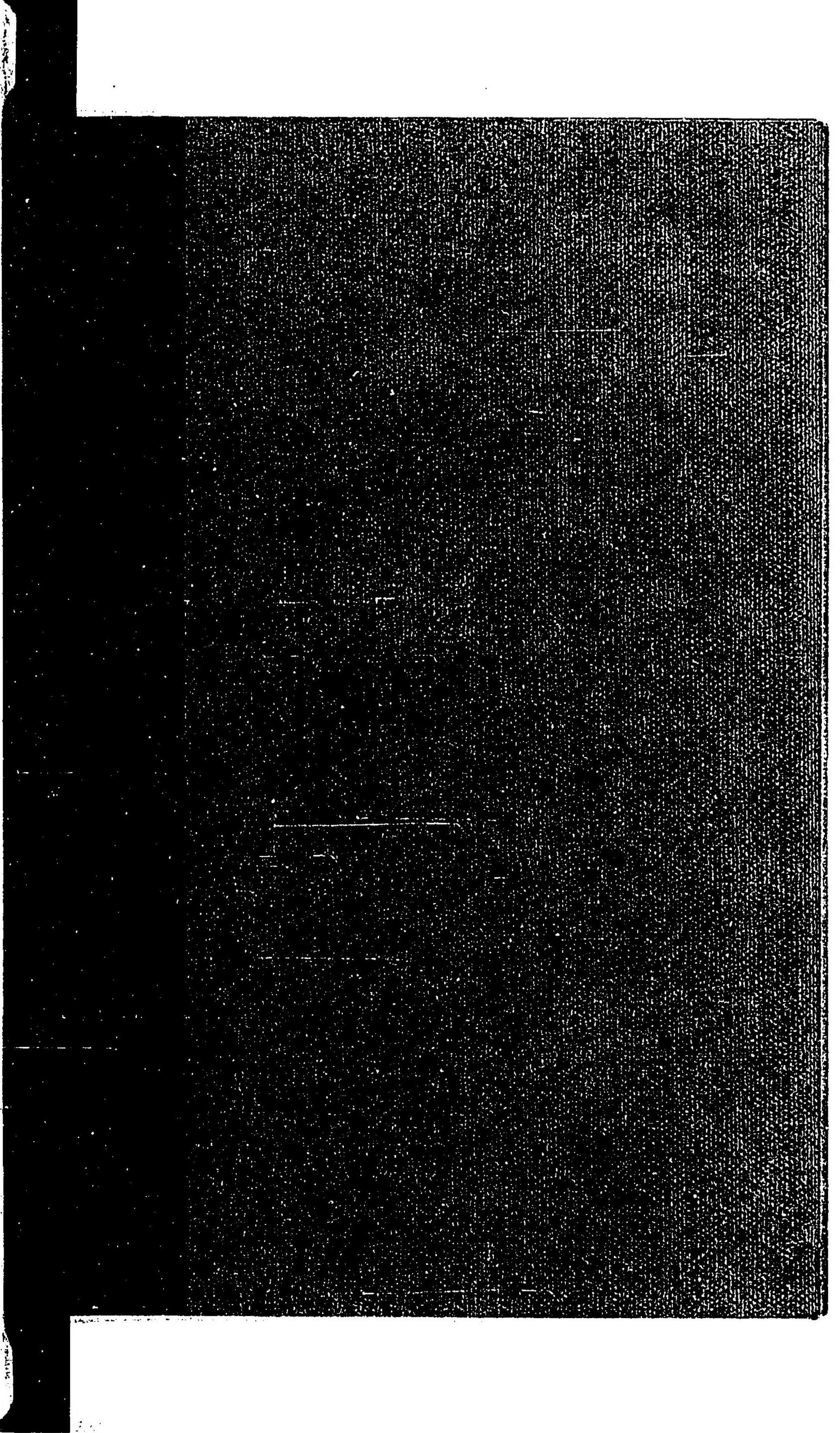
岡山縣岡山市大字東中山下二百十四番邸

細謹舎製本工場



4





特 25

323

衛生実用

国立国会図書館

060345-000-8

特 25-323

衛生実用

細謹舎

M25

CBM-0138

